

審判員

○誤審

サッカー・ワールドカップ日韓大会で一等興味深かったのは、審判の微妙な判定が誤審として話題になったことである。大会主催者の国際サッカー連盟は誤審のあったことを認めた上で、「審判も人間であり間違いはあるが、判断は人間に委ねるべきである」とビデオという機械の眼による判定方法の導入を否定している。サッカーの審判員は日頃から技術を磨いて、スタジアムの大観衆が観戦しているという公開の場の中でも、公明正大に最良の判断をしているという自信を持っている。人間の眼による判定は、誤審となり得ることを許容するということが、競技者と審判と観戦者との微妙な信頼関係が出来て可能となるシステムである。

○災害と河川環境

河川氾濫が広範囲に及ぶ壊滅的な災害は、治水事業の進捗もあってか、幸いにも最近では発生していない。しかし、局地的には厳しい災害が毎年発生している。今年の梅雨末期は、北上した台風とこれに刺激された前線によって、局地的に大雨となり、各地で河川氾濫による災害が発生した。

7月に、この台風によって大きな災害を受けた地域の河川を調査した。水と土砂の持つ圧倒的なエネルギーは谷間の田畑を押し流し、氾濫水は家屋を浸水させて、住人の日常生活を拘束していた。今回の災害の特性、河川と地域との関わり等を十分に踏まえた、抜本的改修に向けた事業計画が早急に検討され、地域復興の先導役として河川改修事業が実施されていくことと思う。そして、被災前の河川環境に関する貴重な調査資料を活用して、環境の整備・保全方策等が計画の中に盛り込まれ、河川の持つ多様な機能も又、発揮されるであろう。

○多自然型川づくり

低水路河道に出来た中州と、その周辺の環境維持を目的に、この中州の流頭部を蛇籠の敷設と木杭の打設で処理してある河川を見る機会があった。中州が冠水する程度の中小洪水でも、流路が変わって現状維持は難しいのではないかと思われた。それよりも、この河川が持っている特性等を軽視し、河川をある状況で維持保存するために、人間の力で無理矢理押え付けてい

専務理事 土屋 進



るという不自然さを感じた。

「多自然型川づくり」を始めてから10年以上が経過している。川づくりと言っても、自由気儘に川を改変できる訳ではなく、基礎的な調査、観測、解析を前提としているのは当然である。「多自然型川づくり」を実施している箇所を対象とした4年程前のアンケート調査では、周辺の現況調査をしてない箇所が約7割、水理検討をしてない箇所が約4割とある。アンケートの方法にもよるが、調査、検討をしないまま実施している箇所が多すぎる。対象河川の特性を把握することは川づくりの基本である。それぞれの河川の洪水や環境等の特性を理解し、大局的視点に立った川づくりをすることが大切である。その河川が持っている特性を押さえずに、他の河川を真似たのでは目標も絞れないし、目指す川づくりには遠く及ばない「不自然な川いじり」になってしまうだろう。「多自然型川づくり」は、これまでの土木工学の知識を越えた幅広い知識が必要となってきた。マニュアルが優先する様な社会環境の中であって、マニュアルに依らない知識の積み重ねが必要となるので、特段の努力が必要である。しかし「多自然型川づくり」を目指すならば、調査マニュアルがなくても(あっても陳腐化しやすいのが一般である)、最低限必要な調査は実施していく必要がある。

○最終判定者

「多自然型川づくり」は自然と人間の共同作業の賜物であると言える。人間の側が妥当な働きかけをすれば、自然の側も相応の応答をするであろう。必要最低限の基礎的調査がなくては自然への働きかけの妥当性を判断することができないことになる。調査、検討のないまま「多自然型川づくり」として作業に入れば、川づくりの妥当性を判断できる流域住民の厳しい眼と、自然一幾度かの洪水の履歴と、徐々に自然復元していくための長い期間を必要とする一の厳正な応答に耐えることは出来ないだろう。又、治水と河川環境の整備・保全との折り合いや、工法の採用決定は河川技術者が最終的に判断する機会が多い。この場合も、環視している流域住民に、日頃の調査、検討結果から最善を尽した判断であったか問われているし、機械の眼よりも厳正な自然の眼が最終判定者として後ろに控えていることも忘れてはならない。